

昭和19年5月1日（月）

曇り、後晴れ。一銭切手百枚の在庫。請求日に非ざるも一銭二万、二銭一万請求のこととす。荒巻氏、此朝帰宅出勤遅る。昨班長さんの料理は今朝までに腐敗せしもの多く、種々問題を提供す。余は一物も触れざりし。魚類は別府より入手せる由。輸送の関係もあり、品質の低下を免れざりしものなるべし。午後悦子来たり。団子持参、八重子里行きの土産ならん。余之にも手を触れざりし。昨巖より坊に与ひし餅は、午後焼きて遣る。切手受取り、余坊連れ行く。夕方気温低下。巖此の朝来たり。米袋かして呉れと云ふ。二つある袋は何れも穴あり。之を縫ふて持行く。余の室掃除の際なり。藤の花半開。

昭和19年5月2日（火）

快晴。坊早起き。切手、印紙請求、葉書もあり。受取りにも余行く、坊も連れる。此の間みわさん積立受入れさる。午後一時近く、何日も待たさるるに劫を煮やして遅く行く。葉書は猶倉庫に保管しあり。常会午後七時半、其の前湯に行かる。坊眠らず遂に連れ行かる。会半ば、余り悪戯が過ぎるので連れ戻らる。余寝かす。常会は国債類の割当額の決定に、上本氏の腹案にて強制的に額の通告を行ふ。此日夕、パン造らる。

昭和19年5月3日（水）

曇り。国債隣保消防報奨金、交付額を基礎に算出す。午前中を費やせり。保管証券受付多数。午後六時より上本氏送別会。竹屋の二階にて海軍軍人、其の他親近者も参加。頗る派手に、馳走も班長さんとは比較にならぬ種類もありし如し。芸者も喚びたる如く賑やかなりし。坊は

余連れ、貴船神社に遊ばす。蜜柑を遣り八時頃寝る。それから余の仕事に移る。

昭和19年5月4日（木）

快晴、風強し。切手請求、みわさん坊や行かる。昨夜の残肴、一物も余頂かず。小包の取集、遅延を理由に本局に持行けと拒絶せし態度、森田さんに注意す。

昭和19年5月5日（金）

馬肉の配給あり、夫れをうどん屋に持行かる。うどん1、50分呉れる。牛肉百匁と誤認せしものの如し。一昨上本氏宴会の際、舞踊あり。森田さん坊を連れ行かんとす。余「以ての外」と称して拒絶す。尤も坊も眠りかけて居たる為でもあるが、主たる理由は、酒席に子供を連れぬことが望ましいとの理由らし。然るに当日窓口切手請求、一銭500を一千枚に、二銭100を二百に訂正交付せしを、夕方仕払いの金が不足すとの理由にて、余の査定分一銭500、二銭100を現金として送付越せり。余、心平ならず。翌日森田さんに皮肉の態度を詰りしに、実際はかかる当付けに出でたるには非ざりしも、偶然一致せしものの如し。その不満の心が、当夜、坊を舞踊に誘う誠意を踏みにじりしものと推論せる如し。夫れは余の本心に非ざる理由を釈明するの要ありと信じ通告せり。凡て誤解は自己の浅慮より割出したる想像力、肯綮を離れてあらぬ点に矢が流るるを知らず、それと思ひ込むところに存す。心すべき義なり。

昭和19年5月6日（土）

快晴。切手請求及び受取り共、みわさんに任す。二銭切

手一万百円と記入、電話注意を受け五千枚に訂正。職印持行く筈を、時間遅れ持行かず。夕食早く済まして、藤花を見に六時頃出掛く。みわさん教会より富永を待居り、余後で出発。藤は満開乃至七分咲き。注連房のは半開なりし。此の朝ウドン頂き、夕食同様残り分頂く。森田さん妹、静子さん夕方来邸。正明さん連れ、林檎など貰ふ。余腹具合悪く、寝る前一度厠に行く。

昭和19年5月7日（日）

前田さん荒巻さん臨時常会、明日の防空演習打合わせを為す。水槽に水を湛え砂を盛る。森田さん妹、正明ちゃん等、午後二時過ぎ販らる。巻柿一やる。理髪屋数軒廻る。休業二軒あり。他は何れも客待ち二、三名あり。更に八時頃行く。既に消燈、眠って居る向きもあり引返す。朝ウドン、夏蜜柑二つ食ふ。今も下痢気味。

昭和19年5月8日（月）

晴れ。午前四時より警戒警報発令。不思議に寝坊して四時起床。五時空襲警報、余六時頃仕度して出動。八時過ぎ警察署長、消防組頭等監視の下、一二班聯合、焼夷弾落下消火作業やる。組頭の講評、署長の挨拶あり、解散。十一時まで各班別に演習の後、終了。巖来たり。国債購入資金三十円置いて行く。澄子へ葉書出す。みわさん夜、巖方に至り十時半販宅。ふだん草、大豆など貰ひ来らる。監察来の報あり。澄子への葉書は、坊や迎ひに来て呉れと云ふに在り。

昭和19年5月9日（火）

曇り、後降雨。葉書在庫皆無、六千請求。現金納付方

はみわさん（坊や連れず）、受取りは余行く。八重子一時頃来たり。唐豆持参す。葉書運ぶに傘さして行く。理髪屋に行く、40となる。八重子退院後、宮永の姉の家に静養中の兄嫂の許に、見舞いに出掛く。其の間秀樹を預かる。秀樹泣いて途方に暮れられ、負うて三時間も守りさる。神様にも用達にも一切外出不能。嫂外出、販りを待ちたる為と云ふ。夕食うどん、夜雨甚だし。

昭和19年5月10日（水）

朝一時雨上る。武田化成より往復百電請。木下主事に通告、請求許諾。四円の請求は空前なり。現金納付、現品受取共にみわさん行かる。坊負われて朝は寝たまま、日出夫ちゃん早くより遊びに来たり。過半は我家に暮す。夜に入り雨猛し。電線障碍。受付たった貳通。映画俳優の実演蓬萊館にあり。神鋼飛機増産感謝。従業員慰安会昼夜二回。東海林太郎等一流処芸能大会、局員達も臨場。五時過ぎより余留守居、荒巻氏に代わる。大分線四時過ぎ全通。福岡は八屋吹中にて受付居る由。一通受付を了す。電信符号にて送信。みわさん北浦町、十時半販宅。巖、八重子赤坊を措きて貝拾い。絹貝多数貰ひ来らる。但し是が処分は、教会に持込みしと記憶す。

昭和19年5月11日（木）

夜より午前にかけて、相当量の降雨あり。市外電線不通。午後より曇り、各線漸次恢復。昨、前田岩尾両氏二階に泊まる。朝一旦帰宅せる如し。荒巻さん朝出勤。阿部さんに夕方、貝持行かる。道子より葉書。澄子と呼子の前田氏に世話して貰ひたしとあり。夜十一時まで前田氏に手紙を書く。

昭和19年5月12日（金）

快晴、春日和照。澄子突然見ゆ。萩の餅持参、黄粉も自製し来る。坊やに洋服出来着用せしむ。夕食ウドン、萩の餅も頂く。切手請求せず。朝、庄町内会長より、国債債券代金届く。逓信局分に対し払込みを了す。澄子の話、切符手に入らず一日遅ると。

昭和19年5月13日（土）

午前中曇り、後次第に晴れ。午後みわさん、栄町岩尾松雄過払い金徴収に出動。鉄刀類の破損修理をも頼む。岩尾松雄は出征。其の兄は局舎模様換えの際の大工なるが、鼻息荒く弁償等は局側の落ち度として、自分には其の義務なしと強調し居れることとて、余に於いて弁償せんと覚悟しありたるも、相手の妻女はみわさん知己の豆腐屋の娘。其の辺の関係にて割合順調に運ぶらし。主人留守明日来たれとあり。此のみわさん留守中、丹治松本両氏来局。澄子にコブ茶を持来させしむ。一時間話す。丹余氏娘三・七・十、下駄注文あり。求めてやる約束す。夜みわさんウドン屋に注文に行かる。森田さん微恙（びよう）、荒巻さん独りで切り廻す。四時より代わる。此の朝前田に手紙の返事を促す。夜十一時返電来る。澄子、貢の戦死かと恠（あやし）み起きて来る。「病氣臥床仔細文」。

昭和19年5月14日（日）

森田岩尾両氏正午まで。切手代金払込受取共、みわさん行かる。三時夕食ウドン。巖八百円定額持参、夕食饗応す。五時頃中津局より切手持行けと督促を受け、其れ

を済まして巖方に澄子と行かる。坊、日出坊の三輪車、室内に持込み乗り廻す。之を路上に運び、日出坊に発見、取上げられ泣く。神鋼工員養成所生徒より、配給の小包菓子類を郷里に送る時、外なるも引受けやる。六七ヶに及ぶ。

昭和19年5月15日（月）

朝の間曇り、後晴れ。荒巻さん8から6時。森田さん発熱38。午後より昂進相談所行き、終日かかる。葉は京町奥永99以外持合わせなしと云ふ。そこまで行かる。今日監察栄町に来て居るらし。呼子前田氏より葉書。急性肺炎、九死に一生を得たり。結婚問題どころでなしとあり。猶病辱にある如し。南部部会長、山移局長臨局、栄町に行かる。監察は栄町より一つ松に行くらし。乾甘藷給与、小麦粉を入れ練って夕食に頂く。みわさん教会にて、某会社に奉職の二遺児を擁する人物に、澄子を配せん話が出てつつありと。余その話は、前田の方が埒明くまで見合わすべき旨、懇諭す。呼子に病氣見舞いに行かしむることとす。森田氏六時過ぎ帰局。荒巻氏それまで居残りつつあり。余同氏の労を犒（ねぎら）ふ。夜坊を引取るとは経済上困ると云ふことから、意地悪く出て澄子を泣かす。余に往々かかる欠陥あり。

昭和19年5月16日（火）

快晴。巻柿多数穴瀬氏より頒与を受く。前田の外、福岡、橋本、岡本等に進物として持行くことにして、準備されたるらし。鱻（ふか）配給あり。豊後町長より観察員の行動に付き照会あり。余にも不案内の旨回答せり。みわさん五時の汽車に乗り損じ、七時にて出発。福岡へ電報に

て通知。うどん参円余手に入れ、内半分持行かる。今日の臨時常会は、宇佐航空隊に勤労奉仕の件。朝八時、八重子乾甘藷にて団子を造り、七つ程持参す。秀樹に洋服調製依頼あり。切れ地持来る。巖、宇佐航空隊勤労奉仕。夕方より曇天。降雨の恐れあり。

昭和19年5月17日（水）

朝来曇り、降雨模様。九時頃より、迺（すなわち）降り出す。終日歇まず。午後より資金四千円請求。雨の為、坊連れず。降雨も往路は僅少なりしも、還り路には漸く繁し。日出坊遊びに来たり。澄子握り飯やる。雑炊頂く。配給鯛少々83、余は昨餐を雑炊に入れたるを頂く。坊に生卵を御飯にかけて朝やる。淳は数杯傾くと云ふが、坊は僅か二碗に過ぎず。夕方抱きて寝かす。改めて母を慕わず諦めのよいにも驚く。葉書没有。主事さんに電話、二千請求することとす。

昭和19年5月18日（木）

午前中雨模様。切手請求、午後受取りに行く。何れも坊を連れる。午後漸次天候恢復の模様。葉書は二千にて今日は打切らる。窓口売り一日200に制限す。一人当たり三枚乃至五枚。夕方うどん頂く。澄子駅前食堂に坊やのお伴して行き、うどん一円、ミルク50銭。後者は半分水割りありと悔やむ。夕方快晴、稍（やや）気温低下。澄子、秀坊の洋服調達持行く。余九時前就床。澄子九時過ぎ巖と販宅。宇佐航空隊に勤務奉仕に行き、畜（もっこ）に土を容れる役をやる。一番辛い仕事らし。百姓で練え続けた者でも関節が痛むと悲鳴を上げるらし。自分は翌日集金に出掛けて、人を驚かしたと自負する。余

の枕許で茶を嚙みて帰る。夜八時、唐津橋本君より電話。午後七時東唐津より福岡に向ひ、みわさん出発の報なり。

昭和19年5月19日（金）

午前曇り、午後より晴れ。午後一時みわさん販る。衣料切符申請書提出。みわさん土産鮮魚300目（三尾）持来らる。福岡に一尾差措ける由。神様に一尾、うどんやに二尾持行かる。土産物は鮮魚に止まらず。陶器の飯椀十人前、七輪（福岡にやる）、茶呑椀十人前等、煎り子、素麺等貰ひ来らる。祖母の命日、教会より飯炊いて頂く。余はうどん頂く。朝頂ける昨日の残りのうどんは酸味を帯びたり。夜澄子切符求めに駅に行く、3、30。夜班長さんより夏蜜柑求め来らる。澄子七、余六とる。

昭和19年5月20日（土）

曇り。午後零時の汽車にて澄子出発。旅費を遣る手筈なりしが忘れて遣らざりし。余は之を知り追迹及ばず。みわさん郵便を送る。午後より降雨。切手請求受取共、みわさん行かる。朝は坊寝ぼうし午後連れらる。澄子に米四升、味噌、塩、うどん拾（八重子より貰ひし分）、外にみわさん小切れ夏蜜柑。朝は八重子秀坊連れ来たり。之に夏蜜柑二つ遣りしに、澄子気の毒がり自分の分配分、措いて行く。終日降雨。森田さん厳父、夜正明さん連れ来らる。森田さんの病氣見舞いらし。今日森田さんレントゲン診察に相談所行き。想像せしより早く販局さる。熱はないと謂われたが、実際は恰度、熱のない時刻検診した為らしと云ふ。

昭和19年5月21日（日）

曇り、次第に晴れる。昨夜のカンコロ頂く。班長さんに菓子进行贈り、返礼にカンコロ団子进行、行彦さん坊やにと持来る。夕食後みわさん巖方に、来月四日の勤労奉仕に、澄子の強いての頼みもあり、代務方要請。十時頃還る。森田、巖、又正明さん午後皈還、為替の両氏見送る。卷柿一本みわさんより贈る。温度低下、室外は熱きも家の中は冷ゆ。それでも蚊の襲撃執拗なり。

昭和19年5月22日（月）

概ね晴れ。室内は冷ゆ。二三日前より、日出夫ちゃん見えぬ。広島に面会に行けるらし。班長さんの養子、肝臓
．．．